

一八八二年十月二十四日(火)

ドツキネーシヨル
南神村の寺院でバララームたちと共に——バララームへの教訓

〔前兆きざし——ウソをつかないこと——あらゆる宗教の調和——女と金がマヤーヤ〕

十月二十四日、火曜日、時間は午後三時から四時の間。タクールは食物を置いておく棚のそばに立つておられる。バララームと校長がカルカッタから同じ馬車に乗つて来て、タクールにごあいさつ申し上げたところである。あいさつがすんで坐ると、タクールは笑いながらこうおっしゃる——「棚の上から食べるものを取ろうとして手を触れたら、ヤモリが落つこちてきてね——思わず手を引つ込めたよ」(訳註——ベンガルでは、ヤモリが体に落ちると面倒なことが起こる前兆とされている)

皆、愉快そうに笑つた。

聖ラーマクリシュナ「いや、笑いごとじゃない。こういうことはよく気を付けなけりゃいけない。わかつているだろう。ラカールは病気で、わたしの手足は痛んでいるんだよ。どうしてだか知っているかい？ わたしは今朝けさがた寢床ねどから起き上がろうとしたときに、ラカールが来たのと思つたら、あの人を見てしまったんだ！(一同笑う) いやいや、前兆きざしをよく見なけりゃいけない。いつか、ナレンドラが片盲目めくらの青年を連れてきてね——その友だちは片目も全然盲目めくらというわけでもないらしいの

だが、満足な目は一つだけだった。それを見て、わたしはまた、どんなことが起こるのかと思つたものだよ。(訳註—ベンガルのヒンドゥー教徒は、朝、最初に会つた人が、その日の運を示すものと信じている)

いつだったか、ある人が食べ物を持つてきてくれたが、わたしはその人の持つてきたものを一口も食べることが出来なかった。その人はどこかの事務所に勤めていて月給は二十ルピーなんだが、ウソの伝票を書いてもう二十ルピー儲けていたのだ。ウソをつくの、その人が来ると皆、ろくに話も出来やしない。そうかと思うと、二、三日、事務所に行かずにここに泊まっていたり——。わかるかね？ ほかの場所で何か仕事がないか、ここに来る人たちに紹介してもらつてもらうつもりだったんだよ」

バララームの家族は非常にすぐれたヴィシヌ派の家系である。父親はもう大分年をとつたが、それは立派なヴィシヌ派の信者である。頭にマゲを結び、首にトウルシーの数珠を巻き、いつも手に巻いた数珠をまさぐつてはハリの名を称名している。その家はオリッサの大地主であつて、コタールやプリンダーヴァン、そのほかいろいろの場所にクリシユナやラーダーの神像をつくつて祀つたり、修行者や参詣人のための無料宿泊所をつくつたりしている。バララームが新たに来たので、タクールは雑談のあいだに、彼にいろいろな教訓を与えて下さる。

聖ラーマクリシユナ「いつだったか、ある人がやつて来た。聞いてみると、黒い肌をした女房の、まるで奴隷どれいになつているじゃないか！ 連中にはどうして神様が見えないと思う？ 女と金という幕まくらが下がっているからだよ。それにあの人は、あんたの面前まへでいつだったか、どういふつもりなのかあんなことを言つて——『私の父のところにある大覚者パラマハンサが来られました、父はその方に鶏肉チキンのカレーを差し

上げました』なんて」(訳註——正統ヒンドウ教徒は鶏肉を食べてはならぬことになっている)

バララーム「あつはツはツはツ」

聖ラーマクリシユナ「わたしの現在の状態はね、大実母にお供えした後の魚のスープなら、少しは食べられる。大実母にお供えしたもので、肉は全然食べられない。——けれども、指先でなすつてちよつと味を見るんだよ、大実母の御機嫌を損じないようにね」(一同爆笑)

〔昔話——帰郷の際ポルドワンの路上で——ナクル^{アーチャーリヤ}先生の歌〕

聖ラーマクリシユナ「そうだ、わたしの気持ちを説明してみてごらん。あちら(郷里)へ行くとき、ポルドワンから廻つて——わたしは牛車に乗っていたが——大嵐になってしまった。車の近くに何人か人が寄ってきた。わたしの連れが、『あいつらは強盗ですよ!』と言った。わたしは、神様の御名を称えはじめた。だがね、時にはラーマ、ラーマと言ったり、時にはカーリー、カーリーと言ったり、またこんどはハヌマーン、ハヌマーンと言ったり、知っている限りの御名を称えていたんだが、どういうつもりだったかわかるかね?」

タクルは、唯一の神に無数の名があるのに、異なつた宗教を奉ずる人々や異なつた宗派の人たちが無駄な争いを繰り返している、ということをご話によせて教えて下さるのだろうか?

聖ラーマクリシユナは、バララームに向かつて語り続けられた。

「女と金がマヤーだよ。この中(マヤー)に長いこと住んでみると、心の目がだんだん曇つてき

て——大へん結構な状態だなどと思い込んでしまう。掃除人夫は、ドブをさらえたゴミの壺を頭に乗せて運ぶ。長いこと続けているうちに、臭いも何も平気になってしまふ。

神様の名を称え、讃歌をうたうことを繰り返しているうちに、だんだんと信仰が生まれてくるんだ」
こんどは校長に向かつて——

「体裁が悪いなんて思っではいけないよ。恥ずかしい、憎い、怖い、この三つがあつてはいけない。

郷里くにの方の讃神歌キールクンはとてもいいよ。横太鼓コイルの伴奏で歌うのさ。ナクル先生アイチャイリヤの歌ときたら、何ともいえないほどすばらしいんだ！ あんたのところでは、プリンダーヴァンの聖地で何か奉仕しているのかい？」

バララーム「はい。礼拝堂を一つ建ててごさいます。シャーマ・スンダラ(クリシュナ)を祀つてあります」

聖ラーマクリシュナ「わたしもプリンダーヴァンへ行ったことがある。ニドゥニドゥウの森ウグアンはいいところだね」